

こうほう ショッキング

Vol.68

Kōhō shocking



よしの はじめ
吉野 元さん

●プロフィール

33歳。宮城県仙台市出身。琉球大学海洋自然科学科を卒業後、東北大学大学院に進学。専門は進化生態学で、生命科学博士。東北大学の博士人材育成プログラム (PEM) を受講、環境省自然環境局での非常勤職員の後、環境経営コンサルティング会社に勤務。昨年7月より一般社団法人MITの域学連携地域づくりコーディネーターとして対馬へ移住。現在、統括マネージャー。上県町伊奈在住。

○吉野さんを対馬へ導いたものは何でしょうか？

会社勤務当時は、やりがいもあり日々充実していました。でもどこか違和感があつて。そんな時、当時島おこし協働隊だった川口(旧姓木村)さんから「対馬に来ない？」という悪魔のささやき(笑)があつて。重ねて移住の決め手となったのは、対馬海峡でシャチに追われるイルカの記事。僕は小学生の頃からシャチが好きで、研究者を目指したほど。あつ、対馬にシャチがいる！行こう！って(笑)。1週間で決断して3ヶ月後には会社を退職して対馬に来ました。

○充実した生活なのにごか違和感があつたというのは？

大学院の時訪問したボルネオの光景なのですが、美しい野生動物が住むかわらで熱帯雨林が開拓され、パーム油を採取するための畑が広がっていたんです。パーム油は、お菓子やインスタントラーメンなど多くの商品に使われています。つまり、私たちが使うもののために、何億年とかかって出来上がった遠い地域の自然や生態系がほんの一瞬で、未来永劫、消えてしまっている。これはかなりのショックでした。自分が都会で普通

に生活していることが遠くはなれた自然を壊している、これは罪じゃないか？って。自然と共生する持続可能な暮らしとは？と自問自答する日々でした。

○そんな時に対馬へのパイプが繋がったのですね。

ええ。連絡をくれた川口さんとは大学院の研究仲間でもありますが、彼女の志多留地区への惚れ込みようや熱い思い、目指していることに大いに共感しました。一方で彼女の生き方への憧れもあつたんです。対馬で生き活きしている彼女、都会で不完全燃焼の僕：自分のキャリアを世の中に役立たせたいという思いでいましたから、自然との共生をキーワードに海、そして海を育む森・里・人の繋がりとというリアルな世界で仕事したいと、対馬移住を決めました。

○対馬の生活はいかがですか？

それはもう、一変しました。感動すること、ワクワクするところがたくさんです。何はともあれ魚が旨い！そしてその魚を釣った人の思いも味わえるという食の価値観は、お金に換えられません。また対馬の風景も、人も、最高に素晴らしい。「本物・実体」が対馬にはある。都会に

ないものがたくさんある。実際に、対馬に来た多くの大学生も対馬の魅力に虜になりますよ。

○吉野さんの、また対馬のみんなの生き方の指針とは？

対馬の人たちでは当たり前前の「おすそ分け」の生活にヒントがあるのではないのでしょうか。貨幣価値ではなく、人のつながりで生きる豊かさや幸福感。物々交換の世界。これって、実は地産地消や地域通貨、雇用を増やす仕組みそのものです。島内に資源が留まり、循環し、島の暮らしが豊かになる。必要な分だけ地元の自然の恵みをいただく。これこそ、自然と共生する持続可能で豊かな島暮らしではないかと思えます。

今は行政の政策支援をしていますが、将来は私自身、やっぱり海やシャチと繋がってほしいので、そうだな、釣・エコツア―体験民泊をなりわいとしてつつ、釣った魚で鮓を握り、対馬の人に振る舞いたいですね。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。次回は豊玉町仁位にお住まいの舟橋仁さんです。お楽しみに。